

Title	書評：澤井敦・有末賢編著『死別の社会学』青弓社、2015年
Sub Title	
Author	大出, 春江(Ode, Harue)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2016
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.21 (2016. 7) ,p.110- 113
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20160702-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：澤井敦・有末賢編著『死別の社会学』青弓社、2015 年

大出 春江

本書は「死別」をめぐり、社会学および社会心理学の研究者 9 名が執筆した論文集である。日本国語大辞典によれば、死別とは「身近な人が死んで二度と会えなくなること」とされる。しかし、本書で扱うのは必ずしもそうした身近な人との死別経験に限られていない。執筆メンバーが参加していた「死と死別の社会学」研究会の研究活動の成果とあるが、これを『死別の社会学』とした意図については、編者の一人、澤井敦が序章で解説している。以下では各章の概要を紹介し、最後に本書のもつ意義と今後の課題について考察してみたい。

序章で澤井は「死別の社会学」とは「死別という現象」を通じて現代社会を考えるという立場を示す。死別は従来、「個人の問題」すなわち悲嘆研究として心理学や精神医学の分野で扱われてきた。しかし悲嘆や哀悼も含め、「死別という現象に対する社会的な対応・対処のあり方は、より広い視野から問題化」することが可能だとする。伝統的な社会集団や社会関係だけでなく、メディアやネットにおける対応のあり方も含まれ、さらには「現代社会は...死別という現象をどのように位置づける社会なのか」といった展開がありうるとする。これが「死別の社会学」とする所以である。

第 1 章では鷹田佳典が、T.ウォルターの議論を中心にイギリスにおける死と死別の社会学理論をレビューする。それによると自分らしい悲しみ方を尊重するという脱近代的要素と悲嘆をめぐっては、精神医学的知識による管理統制の徹底という後期近代的要素と緊張関係をもちながら両者は共存するのが現代だ、という理解が示される。死別をめぐる現代西洋社会の今日的状況を、デュルケムの議論を下敷きとして死者の「社会統合」と悲嘆の「統制」という二つの視点から検討する。「死者と共に生きる」ことと「悲嘆を統治する」ことは個人のレベルでも集団のレベルでも重要であり、これらを現実の文脈において検討することが今後の課題だと結んでいる。

第 2 章「リキッド・モダン社会のなかの死別」において澤井は、死にゆく者と死に別れる者の「関係」に起こる現象として死別を考える。リキッド・モダンな社会における死と死別に対する現代人のもつ不安とそれに対する緩和戦略というバウマンの視点をヒントに、澤井は「関係配慮的自己決定」という言葉によって近年の「終活」ブームの意味をとらえる。それは「二人称の他者」への配慮に基づく生前からの準備であり意思の記述である。これは「継続する絆」の重視という新たな変化ともいえる。この変化は、個人化された社会において「二人称」の他者に限らず「三人称」の他者まで広がる可能性はあるのか。澤井はバウマンの議論を踏まえ、死の観念に強く影響する死別の体験のもつ固有性に着目し、そこに「個人化され分断された人々の苦境を...緩和する潜在的 가능성이秘められている」とみる。そして「三人称」的な位置にあ

る人々のなかにおいても「ある種のゆるやかな共感の連鎖」が生み出され、そのことによる「関係配慮的な自己決定に基づく関係性を、より広範な関係性へと結び合わせていく」可能性を示唆している。

第3章は門林道子が「闘病記に現れた死別」と題し、闘病記を書く行為をグリーフワークの視点から捉えている。闘病記を書くことは「死者との関係をいったん整理した上で、新たな世界を組み直すポジティブな作業」とみて、これに「レジリエンス」概念をあてはめる。門林は、書くことの意味・効用を取り出すというところに焦点を置き、論文後半はテキスト(『はなちゃんのお味噌汁』)から、死別の悲嘆や苦しみからどう立ち直るのかを、レジリエンス構成要因の抽出作業から示している。

第4章では有末賢が「配偶者との死別と再婚」について論ずる。配偶者との死別は必然的に婚姻上の位置変更をもたらす。死別後の再婚には、さまざまな要因が関わる。論文後半、有末は死別した当事者としての自己の経験を振り返る。再婚生活において、死別した配偶者との関係性をどのような形で維持したのか、死別した配偶者の写真や位牌の扱いをめぐるエピソードを用いて記述する。死別後の再婚という婚姻上の位置変更は「語りにくい」とされる(再婚した人へのインタビュー依頼がいずれも承諾されなかったという)。この「語りにくさ」は死別した配偶者の位置、すなわち再婚生活に占める「死者のための場所」があいまいな課題をもっていることを示している。

第5章では水津嘉克がジャンケレヴィッチの人称態による死と死別の類型を再考する。そのなかで水津は、ジャンケレヴィッチのいう「二人称の死」が常に「一人称の死」にも等しいかそれ以上の苦痛をもたらすものとして無前提には捉えられていないことを指摘する。水津は「二人称の死」の「隔たり」に着目し、そこから「二人称の死」は切実で悲しいものだ、とする周囲の思い込みが死別を体験する当事者に対し抑圧的に働く可能性を指摘する。「二人称の死」とは「親しい人の死」と当たり前に考えないこと、「死」や「死別」の経験、それに引き続く「悲嘆」に関して、「その高い個別性を担保すべき」であると同時に「その個別性は様々なかたちである可能性を持つ」ということを踏まえるべきだと論ずる。

第6章は社会心理学の立場から米田朝香が死別体験をとらえる視線について考察する。社会心理学の領域で近年さかんな Post-traumatic Growth (以下、PTG) 研究やポジティブ心理学を批判的にレビューし、米田自身による大学生の死別体験に関するインタビュー調査をもとに、PTG 研究の問題点を指摘する。死別体験後の成長という側面だけが強調されることは、結果として死別体験者に心理的な負担を与え、また他者から理解されないという意識をもたせてしまう危険性があることを指摘する。

第7章「夢に寄り添うーある死別の語りとその多声性」において、鈴木智之は一人の女性による死別体験の語りの分析を示す。長期にわたる介護の後に母親と死別した女性の語りを、4つの「声」という軸により分析し、死別体験における多声性を浮かびあがらせる。介護や死別の体験はその当事者にとって多様な意味をもち、「語られたそばからまた別様の物語を呼び起こ

し...尽きることなく語りを持続させる」と鈴木はとらえる。こうして複数の<物語>の連動関係と語られる<物語>の多層的な継続を提示することで、「死別」という経験の厚みに迫る。病いの軌跡や年齢を理由に、その死や死別が予測されていても、死別した人の語りからは、「納得」のいく死や死別の経験などというものは稀な、あるいは時間のかかる経験であることを鈴木論文は浮き彫りにしている。

第 8 章では中筋由紀子が「第三人称の死と関わる」と題し、「第三人称の死」に対し「道徳的関与」の必要を述べる。具体的にはユージン・スミスらの写真集『MINAMATA』やベン・シャーンの第五福竜丸をモチーフにした絵画を通して、『遠隔地の苦しみ』を見るのではなく一人の人間と出会う方法を見ることができると可能性を探る。家族の関係や親密な関係性がもてない現代社会において、他者の痛みに共感する身体や感覚をもつことの重要性を論ずる。それによって、「第三人称の他者との多様で豊かな関わり築く」可能性に向かうことができると考える。

第 9 章の小谷敏論文は「子どもの死について語るときに大人たちの語ること」と題し、1980 年代後半以降の「いじめ自死と少年凶悪犯罪をめぐる言説」からは「大人社会の現実」がいかに歪んだものであったかが投影されたものとみる。小谷は「教室という限定された空間で起こっているいじめ...を過剰に恐れ」た大人たちが子どもの復元力を信頼することができず、そのために「死と再生」の経験をさせることもできなくなったのだと、この 30 年間の大人の言説を読む。小谷は子どもの「死と再生」の可能性を宮部みゆきの『ソロモンの偽証』に見出している。

以上が各章の概要である。個人の死別体験や語りを対象とするものから、死を語る社会のあり方まで、様々な論点と広がりをもつ個性豊かな論文集である。それでいて、全体を読むことで気づかされる重要な点もある。以下ではこの点について 2 つほど述べておきたい。一つは死別をフィールドとすることの意味であり、二つ目は死別研究の資料についてである。

理論とフィールドとの関係は古くて新しいテーマである。本論文ではジャンケレヴィッチ、ゴラー、T.ウォルター、パウマン、エリアスらの社会理論が論者によって援用されている。既存の理論による説明にとどまらず、死別というフィールドの観察やデータとの対話から研究者が生み出す概念として、第 2 章や第 7 章はその可能性を示している。こうした理論とフィールドとの相互作用を通じた概念化は今後さらに期待される。それによって死別の社会学は固有の領域として充実することになるだろうし、社会学理論に貢献する意義をもつと思われる。

二つ目の死別の社会学が対象とする資料について。本書では死と死別を考える上で魅力的な作品がいくつも紹介されている。ドキュメントやノンフィクションはもとより映画や TV ドラマ、小説や絵本、絵画、写真集など、これらが生死について考える想像力を刺激する宝庫であることを本書はよく示している。今後、これらの資料とどう向き合い、扱うのか、その方法論的検討を開かれた形にしていくことは死別の社会学として重要な課題だろう。

死別が起こる関係性を対象とすることの本質的な意味とは何だろうか。かりに死を連続線上におこる一地点の出来事ととらえるなら、死別とは死に別れた人にとって記憶が残る限り、そ

の死を起点とした継続する関係を意味する。死に別れた人にとって記憶し続ける行為、その記憶を語る行為は死者のあり方を絶えず更新していく。言いかえるなら、死者との対話によって死に別れた人の人生が形作られるともいえる。この意味で死別の社会学は記憶を正面から扱うジャンルとして、固有の貢献をしていくのではないだろうか。

(おおで はるえ 大妻女子大学)